

---

## ミッション・インポッシブル3.11

—復興という不可能に挑む—

---

森 章<sup>1</sup>

政府が推進する「復興」だけでは、被災者にとっての真の「復興」には至らない。被災者の心に、明日に向かって今を生きるためのエネルギーがみなぎることなくしては。そのために信仰者には何ができるのか、福島での支援活動をふり返り、私見を述べる。

---

<sup>1</sup> もり あきら: グローバル・ミッション・チャペル 牧使、NPO 法人 Global Mission Japan 理事長

## はじめに

阪神淡路大震災から20年目の2015年1月17日、ふと目にとまったテレビの映像は当時被災した一人の男性を映し出していた。その人はインタビューに答えて言った。「復興が終わったとは思えない… 復興は終わっていない。」

あの震災から20年経った今も、復興は終わっていないと言う被災者がいることに、私は少なからぬショックを覚えた。

被災者はなぜそう言うのだろうか。私は、被災者にとっての復興と行政機関にとっての復興とに大きな隔たりがあることが最大の原因ではないかと考える。国及び被災自治体が「土地利用」（インフラの整備、宅地造成）と「集団移転」を大本命として復興整備事業を進める一方で、被災した人々は「安心して快適に暮らせる恒久的な居場所」と「隣近所との和やかな人間関係があるコミュニティ」を望み、求めながら言葉にできないフラストレーションと毎日戦っているように思えてならないのだ。

インフラの整備と宅地造成はやがて完成するだろう。集団移転も、いわき市の場合、当初の計画から大幅に遅れたとは言え各地区で進んでいるように見える。被災された人々のうちすでに数百世帯が新築された災害支援公営住宅に入居しているからだ。ただし、入居されている人々は2年後に、家賃を全額払って（現在は半額控除）住み続けるか或いは移転するかを選択しなければならなくなる。その方々の中にも、復興は終わっていないと考えている人々がいるのは当然なのかもしれない。

最近報道された福島県内向けのあるテレビ番組では、県内で津波また福島第一原発の被害に遭った自治体職員の精神的苦悩の実状を取り上げていた。3.11後しばらくして、決して少なくない数の職員が早期退職したこと、残っている職員のうち半数近くが鬱などの大きな精神的ストレスに今も悩んでいること、1割近い職員は自殺を考えたことがあったことなどの衝撃的な実態が報道されたのだ。

20年前の大震災からの復興が終わっていないのであれば、3.11後の復

興は言うまでもないであろう。自治体職員の実状ひとつを取ってもそれは明らかで、復興が進んでいるとすら言い難いのではないかと訝る。

私が牧使を務めさせていただいているGMC（グローバル・ミッション・センター）は大震災直後から支援活動に携わってきた。「キリスト教会」という看板を持ち込まないため、宗教の押しつけと誤解されないためにGMCを名乗り、後にはNPO法人GMJ（グローバル・ミッション・ジャパン）も立ち上げて、今に至るまで支援活動を続けている。当初から私たちが目指してきたことの基本は、援助を必要とする一人の人に神の愛に満たされた心で支援を提供する、ということだ。結果として、それは数えきれないほどの方々との人間としてのつながりをもたらしてくれた。被災されたほとんどの人は被災の体験を今もって語ることをなさないが、復興に関してとなると様々な意見を聞かせて下さる。

そうして思われるのだ。被災した人々が心から「復興は終わった！」と言えるような復興は、不可能でしかないのではないかと。そのような復興は絶望的な絵物語なのかもしれない。一介の小さなボランティアNPOにできることなど高が知れている。結局は、国や自治体が推進する被災者不在の復興整備計画なるものが完成してすべては終わる。人々のための理想的なコミュニティづくりのお手伝いなど、不可能だ。もうあきらめよう。2013年の3月末、いわき市沿岸部薄磯地区の津波跡地に立ちながら、私は本当にそう決断した。

しかし、である。そう思ったその時に神が私に語られた気がしたのだ。「アブラハムは望み得ないのに、なおも望みつつ信じた。」アブラハムとは、聖書の中で「信仰の父」と呼ばれている族長のことだ。アブラハム99歳、妻のサラが89歳のとき、神が彼らに子を産ませると約束する。どう考えてもそれはあり得ないにもかかわらず、アブラハムは神のことばを信じるのだ。そして奇跡は起こった。1年後、サラは男の子を産むのである。その奇跡が、現在のイスラエルを母国とするユダヤ人の原点なのだ。

私は観念した。どう見ても不可能だからといって、あきらめる道は私に残されていないらしい。結果がどう出ようと、不可能に挑む以外に道

はないのだ。

被災地の復興は、実は、被災者のこころが新しく奮い立ち、明日の希望に向かって今を生きることができるといふ確信に至ることなくしてはあり得ないのだと、私は思う。被災地に生かされている一人の信仰者として、そのような「被災者のこころの新興」のために自分また自分たちには何が求められているのか、問い続けてきた。それを土台に、私見を述べさせていただこうと思う。以下に記すことはすべて、私の限られた体験と観察また思考の結果としての主観（および偏見？）であることをお含み置きいただければ幸いである。

## 1. 復興のすがた

### (1) 政府の復興構想

国が表した「東日本大震災からの復興の基本方針」<sup>(1)</sup>（東日本大震災復興対策本部）によれば、「東日本大震災からの復興は、東日本大震災復興基本法第2条の『基本理念』、さらには東日本大震災復興構想会議が定めた『復興構想7原則』<sup>(2)</sup>にのっとり、推進するものとする。また、推進に当たっては、被災者に対し、正確かつ迅速な支援情報を提供するものとする。」（基本方針1. (iii)）とある。

基本法第2条の「基本理念」は、「被害を受けた施設を原形に復旧すること等の単なる災害復旧にとどまらない活力ある日本の再生を視野に入れた抜本的な対策及び一人一人の人間が災害を乗り越えて豊かな人生を送ることができるようにすることを旨として行われる復興のための施策の推進により、新たな地域社会の構築がなされるとともに、二十一世紀半ばにおける日本のあるべき姿を目指して行われるべきこと。」から始まる6項目に分かれている。骨子は、国と全国各地の地方公共団体との連携協力と被災地住民および全国民の意見の尊重また反映、全国民の相互連携また多様な主体の自発的共働、少子高齢化などの国内の課題や環境またエネルギー問題など人類共通の課題の解決のための施策への取り組み

み、安心して暮らせる地域づくり—被災地での雇用創出と活力ある社会経済の再生—地域文化の振興と地域社会の絆の維持・強化そして共生社会の実現—のための施策推進、これらすべてを原発災害地域の復興に当てはめる、ということだと思われる。

この復興構想はそれなりに立派なものだと思う。ただ、私にとって問題と思われるのは、この構想の具体化のために地域行政によって進められているのが土地利用の計画と被災した方々の集団移転に留まっている、ということだ。いわゆる「ハコモノ」の整備だけでは、被災した方々の心にうっ積するトラウマから来ている「いのちのエネルギー」の損失を満たすことなど出来るはずもあるまい。政治的な決断や計画をいたずらに批判弾劾することは、もとより私の本意ではない。私が申し上げたいのは、被災した人の心に明日に向かって今を生きるためのエネルギーがみなぎることなくして復興は終わらない、あり得ないはずである、ということなのだ。

## (2) 被災者にとっての復興

被災した方々のお話からして、国は地方行政機関を介して被災した人々にこれらの概念を幾度か提示してきている。だが、それを聞いた何人かの方々の感想から推し量るところ、被災した方々にとって国の考えは難解で腑に落ちないものであるようだ。

では、被災した方々は復興をどのような姿としてとらえているのだろうか。残念ながら、私はその答えを持ち合わせない。いや、実は、被災した方々自身も確たる復興像を持っていないのが現実のようだ。それぞれの被災者にとっては、自分と家族の将来をどこでどのようにして再構築するのが最大の関心事であるので、自分の村の復興、ましてや地域全体の復興に対する「構想」と言えるものは殆どの場合考えられていない、ということなのだ。

それはそうであろう。一日にして家族、家屋、自営の工場や職場を失った方々が、他の者には想像もできない喪失感に潰されまいと、人知れず全力で戦っているのである。震災後しばらくして自治体が被災地の住

民と話し合いを持ち始めた頃も、あの恐ろしい大震災から4年が経とうとしている今も、それらの人々に地域の復興を問うたところで一致した意見を期待することは土台無理と言うものだ。

それとは裏腹に、被災した人々は「これは復興ではない」という明確な感覚を持っている。いわき市の復興事業の一つとして昨年夏に完成した災害支援公営住宅に住むある方は、言葉を選びながらも、隙間が多い内部や一般的な生活のレベルとは言えない設備状況をお話しされた。集会所のトイレには暖房便座すらない。請負建築会社の経費削減による利潤追求が安普請を引き起こしたのではないかと、私は考える。被災者を社会の問題のごとくに考え、そのような対応をする自治体職員もいるらしい。未曾有の大災害で被災した人々が「被災者としての負い目」を終始感じながら生活しているというのは一体全体どういうことなのか。私は憤りをさえ覚えてしまう。

その中で強烈に印象に残っていることがある。GMC/GMJはいわき市沿岸部の村落の一つである薄磯地区の方々とはことさらに深いつながりをいただいてきたが、大震災直後当時の区長だったS氏が一度ならず言われた言葉だ。「おいらはごを、もど通りでねえぐモデル地区にしたいんだ。」薄磯を元の村に戻すのではない、日本の中でのモデル地区にしたいのだ。それを聞いた時、私の内の何かに火が付いた。

その時から私は、日本のモデル地区になるような復興とはどんなものかを模索し始めるようになった。

### (3) 復興の理想像

キリスト道に徹して生きることを願う私にとって、私たちがより人間らしく生きる社会を作るために出来る限りの貢献をするのは極めて当たり前のことだ。大津波で部落の90パーセントの家屋が破壊され、住民の15パーセントが命を落とした薄磯地区が復興のモデル地区となるために、どんなに小さなお手伝いでも出来るならそれほど感謝なことはない。私は、神に祈りながら復興の理想像を考えの中で求めていった。

3.11直後から、GMCは被災した方々のための支援活動に巻き込まれ

た。そう、巻き込まれたのだ。大震災の日、GMCに滞在していた一人が「神に導かれて」沿岸地区に車を走らせ、津波による膨大な被害を目の当たりにした。最初は、GMCメンバーが経営する乳製品の卸会社の製品が詰まったトラックを走らせて、手当たり次第にお配りするところから始まった。大震災から5日後の早朝には、千葉で活動するアメリカ人宣教師の友から2トン積みトラック2台の救援物資が届けられた。それから、教会メンバーの友人知人や私がつながっている全国各地の教会を通して、義援金や物資が毎日、続々と寄せられるようになり、全国の教会メンバーたちがボランティアとして絶え間なく来て下さるようになったのだ。大震災から2週間経たずして、ボランティアも義援金も世界の各地から来るようになっていた。9ヵ月間にいわきに来て下さったボランティアは世界40ヵ国からの延1万3千人余り、届けられた物資は少なくとも300トンに上る。私にとって、これは神の奇跡である。GMCとしては、大々的に支援を訴えたことがないからだ。訴えたことがあるとすれば、友人関係にメールなどで無事の報告をするついでに地域の必要を知らせた程度だっただろう。

ボランティアの方々との交流、そして世界中のキリスト人の祈りの結果だと疑わないが、私の思いの中には急速に「理想的なコミュニティの姿」が形を取っていった。大いに参考になったのは、私自身が断続して16年住んだノルウェーの街づくりの型である。その形を言葉だけで表現するには無理があるが、それを承知の上でキーワードを並べてみよう。

A) 自然と共存する宅地造成（山や森をなくさず、木々の間に家々を建てる）、B) 防潮堤は設けず、海拔30メートル以上の高台に住宅地及び学校を設ける、C) 旧村落の跡地に住民用駐車場、ドーム型（大津波でも破壊しない）の大建造物を2棟ないし3棟設置し、スーパーなど生活必需品の供給店舗、大震災ミュージアム、住民の寄合会場的くつろぎスペース、クリーンエナジー（風力、波力、水力、ソーラー等）の最新技術展示博覧会場（薄磯地区の電力供給源）などを置く、D) 更なる雇用の創出として酸素水生産工場、水耕栽培農園、福祉サービス提供館、ホテ

ル／宿泊施設などを設置、E) コミュニティづくりの不可欠な土台は健全な人間関係であるはずゆえ、トラウマセラピーも含めた信頼関係構築セミナーに準じる講座／座談会／交流会を定期的に展開、F) コミュニティ再構築のための財源を広く海外の投資家（教会関係主体）に呼びかけ、呼び込む。

この原案のうち、少なくともA) とB) は、こと薄磯地区に関する限り手遅れだと言わざるを得ない。すでに60メートルの丘陵は木々の伐採が終わり崩壊作業も始まっているところであり、防潮堤の建築もかなり進んでいるからだ。

それなのに、私の心の奥深くには相変わらず「不可能に挑む」火が燃えている。理想の追求をあきらめて現状を受け入れてしまうなら、薄磯を始めとする被災地は極度の高齢化社会となり、過疎化の果て消滅しかねないであろう。実は被災した人の中にもそれを見通している方々がいる。奇跡の神を信じる者にとって、それを受け入れることこそ不可能なのだ。

## 2. 信仰者にとっての今後の復興支援

東日本大震災から4年が経とうとしている今、私に見えているのは、被災した人々の心のエネルギーとでも言うべきものが底をついている様相だ。

福島県民のうち12万人ほどが未だに避難生活をしていると、平成27年1月1日付福島民報は報じている。一方で、復興庁の資料は8万1千人余りとしている。どちらが真実かは分からない。確たる証拠はないのだが、否定的な事柄に関して国の公表する内容は概して値引きされているように思われる。いずれにしても、福島県内の震災関連死者数が震災直接犠牲者数を200人以上も上回る1839人となっている（平成27年1月21日福島民報）ことは無視できない事態である。これは被災地三県の中で群を

抜く惨状だ。いわき市のちまたでは、自殺、孤独死、離婚が被災者の間で増加しているとささやかれている。最近あまり耳にしなくなっているが、福島第一原発近辺からの避難者の方々が外食やギャンブルなどに浪費しているらしいことも含めると、被災した方々の心は壊れていると言わざるを得ないのではないか。では、壊れた心を修復する手立てはどのようなものか。

その問いと答えを国や自治体に求めることは無理であろう。それこそ正に宗教、信仰者に課せられている役割であると思う。

## (1) 宗教者の貢献

### ①宗教の役割

浄土真宗本願寺派親光山蛭川寺のホームページによる宗教の役割の説明は興味深く参考になるもので、私もある程度は同様に考える。

人間は、あらゆる合理的知識をもっても打開できない障害に遭遇すると、それは、生活の継続を不可能にならしめ、生命が危険になったり、欲求不満になったり、不安におちいり無力を悟り、恐怖に陥り、精神の平衡を失う。このように人間が順応不可能な状態に陥ったときに人間は、超自然的な力を漠然と感じこれに頼ることがある。これが危機に根ざす第1義的宗教であろう。又人間の価値、存在の意味など人間の本質（真理）を考えた場合に、合理性のみでは、解決できない問題にぶち当たり、合理性を超越した、超自然的考え方により解決することがある。ここに宗教の第2義的存在理由がある<sup>③</sup>。

宗教と呼ばれるものの存在理由は、正に、東日本大震災被災地の人々のためにあるようなものではないか。被災者と分類され避難生活にある方々については言うに及ばず、被災地に住む多くの人々（筆頭は自治体の職員だろうか）は「順応不可能な状態」にあり、「存在の意味など…合理性のみでは解決できない問題にぶち当た」っているのだ。それらの人々は自力でそこから出ることにはできないのである。つまり、外部からの支

援なくしては、その人々が自分の存在の価値や意味を受け入れ、逆境を乗り越え乗り切って大震災後の人生を新しく切り開くことは起こらないわけだ。

では、宗教者／信仰者は被災した人々に「宗教」を提供すれば良いのか。決してそうではないと申し上げたい。村上重良は「宗教」を次のように定義した。

宗教を成立させている基本的要素は、宗教の客観的な事実が示しているように、神、仏、霊、法、原理、道などとよばれる超絶的なないし超越的存在をみとめる特定の観念（宗教観念）である。宗教は、この宗教観念を核として、ふつう一定の社会集団（宗教集団）を形成する。すなわち宗教は、人間の力、自然の力を超えた存在を中心とする観念であり、この観念ないし観念体系に基づく教義、儀礼、施設、組織などをそなえた社会集団であると定義できよう<sup>(4)</sup>。

また、『広辞苑』（第六版）には「神または何らかの超越的絶対者、あるいは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なものに関する信仰・行事」とある。観念、教義、儀礼、行事などの提供で深い悲嘆にくれる心がいやされ解放されるのであれば、いまどきの日本に心の病などあるはずがなかろう。

大震災の被災者となった人々には、宗教の役割が内に機能し具現化している人格が時間と空間を共有してくれることが必要なのだと確信している。

## ②信仰者の役割

大震災の当初から、支援活動について私が思わされてきたことの一つは、こちらが普遍的真理として強く確信していること（例：「イエス・キリストはあなたを愛しています」）を被災した人に言葉で伝えるべきではない、ということだった。その気付きの発端は、あるキリスト人ボランティアの体験である。大震災後まもなく、そのボランティアはいわきに

来てくれた。彼は支援活動の合間を縫って駅前の広場に行き、ギターを弾きキリストの愛を歌いながら通りすぎる人々に呼びかけた。「ジーザスがあなたを愛していますよ！」と。すると一人の男性が歩み寄って来て、ギターを奪い取り、地面に叩きつけて立ち去ったという。その話を聞かされたとき、私はハッとしました。そのキリスト人の熱い心に間違いがあったと言うのではない。ただ、大震災直後の被災者の方々が必要としていたのは、聖書が言う「神の愛」を、言葉によってではなく信仰者の存在と行動によって示され伝えられることなのだと、思わされたのである。

言い換えれば、「すべてに時あり」との聖書の言葉に新しく触れられたのだ。「天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。…中略…黙るに時があり、語るに時があり…」(聖書「伝道の書」)。

自分の宗教の教えなり、宗教の意義なりを把握し、自分の中で整理しておくことはすこぶる重要であることに違いはない。しかし、それは自分のために重要なのであって、それをそのまま人に伝えるとするなら、よほど相手の心の状態を押し量ってからにしなければなるまい。

今一つの気付きは、人間が存在することの測り知れない価値である。

日本中、世界中から来てくれたボランティアと一体となって支援活動に取り組む中で、ともすれば「仕事の量」が多いこと、また大量の仕事をこなせる人がより価値が高いかのように誤解する危険性が付きまとった。恥ずかしながら、私自身いつの間にかそう思い込んでいた期間もあったと思う。そんな私を大きな間違いから目覚めさせてくれたのは、一人の日系南米人だった。他のボランティアたちがにこやかにしている中で、いつも暗い顔をしている彼は特に目立った。彼の牧師がその訳を聞かせてくれた。

A氏は過去に職場で大きな怪我をした。トラックの荷を降ろす作業に就いてた彼だったが、機械が故障して重い荷物が彼の上に落ち、右腕が潰されてしまったのだ。以来、彼は右腕が使えなくなった。それでも、所属教会の大震災支援グループに志願して加わり、他のメンバーと同じようにガレキ撤去作業をこなそうと頑張った。が、力の入らない右腕では限度がある。彼は、自分は何もできない、自分はダメな人間だと自分

を責めていたのだ。それを聞いて私は泣いた。そんな思いをしてまで、支援活動のために仕事を2週間も休んでくれたのだ。私の心も震えた。

そしてつくづく思った。そんな思いを誰にも言わずに隠しながら毎日作業に出ていった彼の存在が、何よりも大きな価値を持っており、その存在がいわき市の祝福になっているのだと。彼のおかげで、私は街づくり、国づくりの原点を見た気がした。

寄り添う、という言葉がある。支援活動以上に、励ましや慰めの言葉以上に、人格を持つ存在が他の人格を持つ存在と共にいること、たとえ束の間でも時間と空間を共有するために身をそこに置くこと。それを、想像できないチャレンジの中にいる人に対し、その苦しみを理解できない自分の足りなさを認めた上で、尊重と感謝の心を抱いて一緒に居らせてもらうこと。それが、信仰者としてさせてもらえる基本的な復興支援なのではなかろうか。

多くの場合、被災した人々は負い目を負う者のように感謝を表して下さったが、私たちはその方々に感謝しようと毎朝確認し合った。支援物資にしても炊き出しの食事にしても、人々が必要としているものが全国各地から届けられてきたのだから、それをお届けするのは当たり前のことである。差し上げようとしても受け取ってもらえなければ折角の支援物資も食事も無駄になるだけだ。喜んで受け取って下さるのは何とありがたいことだろうか。被災した人々も直接に被災しなかった私たちも全く同等、同じ価値を持つ人格同士なのだ。「上から」目線は、私たちの間で厳禁となった。

そのことが骨身に沁みたま時がある。市内の体育館に避難していた60人ほどの方々に炊き出しを提供するため、私たち一行約20人が出かけた。食事の後、メンバーたちはそれぞれ避難者の方々の間に散っていき、一緒に座ったり寝転んだりしながら歓談していた。心嬉しい光景だった。お別れの時間が来て、私はいつものように皆さんお一人一人にお礼を言って廻った。最後の方は出口の所に座っていたが、開口一番「俺はボランティアが大嫌いです！」と言われた。一瞬ひるんだ私に、彼はこう続けた。「俺は車椅子（の生活）じゃないですか。」見ると、確かに彼の下

半身は明らかに不随だった。「ボランティアはいつも上から下の目線で俺たちの所に来る。だからボランティアは大嫌いだった。でも、今日は初めて泣きました。」私の目も潤んだ。

被災した人々も、紛れもなく人間である。いや、むしろ被災した人々の方が人の心の状態に敏感である。ごまかしは利かない。車椅子の青年の上体は逞しく鍛えられていたが、彼の心は研ぎ澄まされていると同時に柔らかかった。私たちの心を受け取ってくれたことを今もって感謝している。

「超越的存在」を観念的にとらえるにとどまらず、その存在と人格的につながるにより一個人の限界を超える愛のエネルギーによって生かされ生きるのが信仰者であろうと思う。信仰者たちが被災者たち、またすべての人たちと継続したつながりを育てるところに、より人間らしく生きる街づくり、中身の伴う復興が期待できるのではないか。

## むすびに

東日本大震災以来、世界各地の数千人の人々との新しいつながりをいただけてきた。薄磯地区の人々がモデル地区に住むことを切望し、夢見ながら、市役所にも足を運び関係者との話し合いもさせていただいてきた。そうして実感するのは、日本の行政の仕組みは細分化され過ぎている上に、規則や法律の縛りが多過ぎること、それがために復興の速度は極端に低下し、被災した人々の目線で復興を考えることが妨げられてきたことだ。被災地の復興が最重要課題であるといったコメントが政府から再三出されているが、被災地に住む者の実感は、それが単なる言葉に終わっているというところだ。

少子高齢化が問題として浮上してから久しいが、このままで行くと被災地はその最たる「モデル地区」になってしまうだろう。雇用の創出に関しても確たる計画も予定も立っていないようだ。信仰者の中から利潤を追求しないビジネスモデルが提供されるなら大きな社会貢献になる。

GMJが具体的に考えているのは、被雇用者が株主になる会社の立ち上げだ。ビジネスの利益が地域に還元されるとはそういうことだと思う。

環境問題と合わせてエネルギーの確保も重要課題だ。世界には数多くの優れた技術やプロダクトが存在する。高密度酸素水の精製と同時に多量の電力を生み出す装置、小型でも効率の良い風力発電、アクアポニックス（淡水魚の養殖と水耕栽培のミックス）、国内の平均の1/3から1/4の値段で出来る住宅、等等。海外の優れたものが国内であまり使用されない理由の大きな一つは日本の法的規制だ。TPPに参加しようと多大な努力を惜しまないにも関わらず、日本に必要な優れたものの導入を阻む仕組みには理解に苦しむ。信仰者たちが互いの違いを鞘に納め、一致して取り組むなら、このような妨げも取り除かれるのではないのだろうか。日本は高い学識を有する人たちに耳を傾けやすい社会だと思う。例えば、宗教系大学などが協働して復興の具体的提案をしていたら、国は耳を傾けなかっただろうか。それは結果論としても、これからも日本は更なる「復興」を進めなければならないわけだから、宗教界がそれぞれの利害や利権を排除して日本のために一つとなって声を上げるなら、奇跡を呼び込むかもしれない。

東日本大震災が起こった結果、私の目はそれまでになく日本の将来に向けられるようになった。ある知人は「大震災で人の心がはっきり見えるようになった」と言ったが、私も同感である。加えて、日本の社会の仕組みもかなりの部分が見えるようになったと感じる。政治、経済、教育、報道、等等。そして、今の構造がこれからも続くなら、日本はだめになるだろうと思う。なぜなら、日本人の優れた特性を凌ぐ破壊性が加速しているように見えるからだ。命のあるものを除けば、私たちの社会にある全ての可視的なものは、人の心と思いという不可視の世界の産物である。ストレス、いじめ、虐待、権力争い、利己主義などのすべては、人の心を破壊する。人の心の破壊は国を破滅に至らせるだろう。

卑怯な暴力によって世界中が躍らされてしまうような今の時代に、人の心の復興、人間らしさの回復と確立こそ急務なのではなからうか。「日本を、取り戻す」というスローガンを掲げる政党ポスターを目にする。

日本は誰かに奪われたのだろうか。私は分からない。しかし、日本人の心は、人間らしさを蝕むありとあらゆるものに奪われている気がする。「日本人の心を、取り戻す！」と言うなら、私は「アーメン!」、「然り、その通りにならんことを」と答えよう。その実現は、全国民一斉にとは行かない。ひとりの信仰者から始まるはずだ。

信仰者は何をすれば良いのか。永遠不変の愛を心に満たすことが最優先ではないか。

自分が存在していることが神の喜びなのだと思え止めるところから愛なるものは自分の中に流れ始める。その次の一步は、「あなたに何が出来るかではない、あなたがいてくれることが私の幸せなのだ」というメッセージを無言で相手の心に伝えることだ。それは受け取る心のエネルギーとなる。そこから、行き詰まり万事休する状態にある心の立ち直りが始まる。その輪を広げ続けるために、信仰者は窮する心を持つ人々に歩み寄り自分の存在を提供しなければならないのだ。

気が遠くなるほど時間がかかるように思えても、不可能に見えても、必ず結果が伴うことを信じてひとりの心を他のひとりの心につなげていくことにより、この国の大変革が生まれることを思い描きながら、私は今を生かされたい。

## 注

- 
- (1) 復興庁HP <http://www.reconstruction.go.jp/topics/000056.html> にPDFが掲載されているので、そちらを参照されたい。
  - (2) 「復興構想7原則」は内閣官房HPで公開されている。  
<http://www.cas.go.jp/jp/fukkou/pdf/kousou4/7gensoku.pdf#search='%E6%9D%B1%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%A4%A7%E9%9C%87%E7%81%BD%E5%BE%A9%E8%88%88%E6%A7%8B%E6%83%B3%E4%BC%9A%E8%AD%B0+%E5%BE%A9%E8%88%88%EF%BC%97%E5%8E%9F%E5%89%87'>
  - (3) 浄土真宗本願寺派親光山蛭川寺HPのアドレスは次の通り。  
<http://www.geocities.jp/yasuragigogo/butsukio2.htm>
  - (4) 村上重良『世界宗教事典』講談社、2000年、4頁。